

2019. 4. 19

ウエーブ

時評



グローバル人材の育て方

たなか・ひとし=69年京大法卒。外務省経済局長
アジア大洋洲局長、外務審議官を経て(株)日本総
研国際戦略研究所理事長。(公財)日本国際交流セ
ンターシニア・フェロー。

グローバル人材育成の必要性が叫ばれて久しい。日本は人口減少社会だし、経済成長は停滞する。よって高い成長を続ける諸国の旺盛な需要に対し日本からの貿易・投資を拡充し、海外の人材を国内に受け入れて成長を高めるしか道はない。だとすれば日本人自身がない。国際人たることが生き残りの条件だ。が、そのような認識が日本社会の底流になつてゐるかといえば、全くそうではない。

グローバル人材という場合、一番大事なのは多様性を受け入れ、外国人と分け隔てなく接することができるかという点だと思う。特に日本は島国で長い鎖国の歴史を

持ち、欧洲のように地続きで人種が混ざり合った地域とは本質的に異なり、国際的な人材育成には格段の困難がある。これを打開していくためには、まず外国语を習得する事や早い段階で外国人と交流することが重要となる。日本人とする外国人の間に垣根を作ってしまう思考形式では到底グローバル人材ということはできない。だとすれば子供の頃から外国人とともに遊び、遊ぶ習慣がついたことが大切となる。私の娘はほとんど英語もできず、英国の私立女子中学校に受け入れてもらつたが、その校長先生が、「当初英語が出来なくて、生徒たちが日本人と接するい

とかができるだけで多様性を学ぶことになり、歓迎する」と言って頂いたのを思い出す。

そのようなことを考えると、大學生になって海外留学というよりは高校生の頃からでも外国人とともに学ぶことが望ましい。ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)は高校生を2年海外に留学させ、現地で外国人と共同生活をし大学入試に必要な国際バカロレア資格を取るプログラムで、ロンダンに本部を持つ。UWCの日本委員会は経団連が運営してきており、現在世界に散らばる17のUWC加盟高校に毎年およそ20名

程度の日本人高校生を選出し、多くに奨学金を給付して留学支援を行っている。これらの高校生はUWCを卒業後、日本や海外の大学に入り、そのままUWCへ入学し、その後いろいろな分野で活躍するグローバル人材に育っている。UWCの卒業生である小林りん女史が軽井沢に全寮制のインタナショナルスクール（ISA-K）を創設したが、2016年にUWCへの加盟が認められた。日本委員会からの奨学金などの原資となるのは、経団連会員企業55社でありを中心とする寄付だ。ただ近年会員企業が減り、企業寄付金が減少し、奨学金対象者を減らさざるを得なくなっているのはまことに残念だ。

残業によって理解されねばならぬ。」「急がば回れ」だ。UWCはそのような目的にかなう格好のプログラムだと思う。もし新規50社ぐらいの企業が50万円の年会費を払い会員になってくれれば、計50名近い高校生を毎年海外に送り出すことが出来る。私は世界各地のUWCに旅立つ高校生たちの壮行会に出席するが、2年の留学の後に帰国した参加者が立派に成長し、文字通りグローバル人材予備軍となっているのを見て本当に嬉しく思うし、このプログラムを拡充しなければならないと思う。

念だ。
グローバル化とかグローバル人材育成の必要性という場合、総論と各論で大きく異なってしまうのは日本特有の事なのか。総論では重要性を日々に叫ぶが、なかなか人材が育っていかない。就職選考